

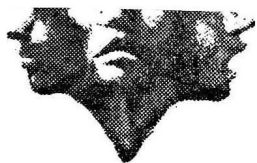
三省堂新書105

ひめゆり学徒隊の青春

西平英夫



SSD
三省堂



三省堂新書
105

ひめゆり学徒隊の青春

西平 英夫

三
省
堂

西平英夫 (にしひら・ひでお)

1908年、奈良県に生まれる。京都大学哲学科卒。昭和13年、沖縄師範学校教授となり、生徒主事、沖縄決戦下のひめゆり学徒隊本部指揮班に所属、ひめゆり学徒隊隊長の位置にあった。昭和21年1月、沖縄より帰る。昭和24年9月、山口大学教授。昭和29年1月4日、死す。松永英美氏は西平氏の長女で、現在、中国放送勤務。

ひめゆり学徒隊の青春

三省堂新書 105

定価 250 円

昭和47年3月15日 初版発行



著 者 ©

西 平 英 夫

発 行 者

株式会社 三 省 堂
代表者 亀 井 要

発 行 所

株式会社 三 省 堂
東京都千代田区神田神保町1の1
電話 東京 (293) 3441 (大代表)
振替口座 東 京 54300

もくじ

第一部 うつりゆく学園

- 一 姫百合学園 2
- 二 遅れた疎開 8
- 三 陣地構築と勤労働員 15
- 四 突然の空襲 20
- 五 看護訓練 28

第二部 ひめゆり学徒隊の青春

- 一月下の出動 34

二	南風原陸軍病院	42
三	初めての犠牲者	55
四	彈雨下の青春	62
五	文部大臣の激電「決死敢闘」	71
六	恨みの転進	83
七	紅に染まる「伊原野」	96
八	解散命令	112
九	終焉	122

西平先生のこと	本村つる	144
沖繩から帰ってからの父	松永英美	153

付録

貴重な秘録還える

琉球新報（一九五四・一・三〇）

沖繩戦闘下ニ於ケル沖繩師範学校状況報告（昭和二十一年一月二十日）

沖繩師範学校教授 西平英夫、同教諭 秦四津夫

あとがき

（本文中のさし絵は西平英夫氏の描いたものである）

日 譜

昭和十九年

十月十日

沖繩大空襲 那覇市灰燼ニ帰ス

昭和二十年

一月一日

空襲 拝賀式ヲ校庭ニ於テ為ス

一月二十二日

第二回大空襲 本校爆撃サレ校舎ノ六分ノ一ヲ失ヒ生徒二名埋没セラル

三月一日

空襲（早朝ヨリ）

三月二十三日

第三回大空襲 敵上陸ノ企図アリ

二十四日

同

二十五日

南風原陸軍病院ニ動員ス

四月一日

敵嘉手納ニ午前九時上陸開始

二十五日

敵ノ攻撃愈々激シク依ツテ生徒ヲ各科ニ配属シ以テ決戦体制ヲ調ヘラル

五月四日

日軍総攻撃開始ニ先立ち敵攻撃熾烈ナリ 友軍又第一線部隊ヲ増強総攻撃ヲ開始ス

五月二十五日

形勢革リ真壁地区ニ転進ヲ命ゼラル

六月十八日

戦車、兵糸洲地区ヲ通過ストノ情報アリ

一〇時 決戦用意ノ命令アリ

一五時 学徒動員解散命令出ズ

六月十九日 未明ヨリ夫々第一線ヲ離脱セシム

六月二十一日 軍司令部玉砕ノ報ニ接ス

第一部

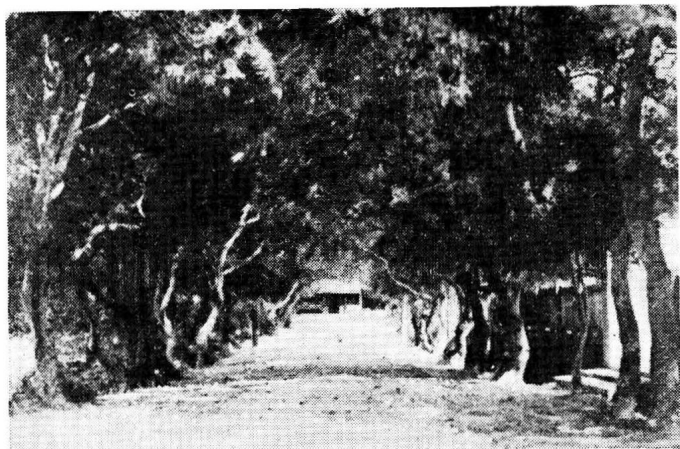
うつりゆく学園

一、姫百合学園

港を中心に展開した新興那覇市と旧王城をめぐる古風な首里の街をつないで、一本のコンクリート道路が常夏の丘陵をぬって白々と横たわっている。その中間にある安里——那覇の郊外、首里の山下とも言ふべきところに、姫百合学園がいらかをならべてその偉容を誇っていた。

左側に沖縄師範学校女子部、右側に沖縄県立第一高等女学校の門札をかかげた校門の前には、柳に似た想思樹の並木が空を覆うて繁り、南国の強い太陽をさえぎって気持のよい木影をつくっていた。玄関をはさんで左右にクロトンが赤・黄・橙と極彩色に繁って赤い屋根の校舎とよく調和した印象的な景観を呈していた。運動場への通路をはさんで、右に七棟、左に二棟、そのほか修養道場・講堂・体育館・図書館の大建築があり、約三千坪に及ぶ一大校舎が展開されていた。運動場は柵壇の大樹が西を限り、東はプールを距てて附属小学校に対し、南北にはガシマルの木影があり、トラックとフィールドは芝生で区切られ、庭園のように一本の雑草もないまでに手入れされて、女子学園の丹誠を誇っていた。附属校をまじえてこの景観は内地でも珍しいほどの偉観であった。

首里城の丘かすむこなた



学校前のガジマル並木

松風清き大道におおどう

そいていらかの棟たかし

これぞ吾等が学びの舎*

そのいらかの下で、師範学校生二百八十名、一高女生八百名、計千名に余る可憐な少女が、毎日平和な、そして誇りに満ちた気持ちで快活に校歌を口ずさみながら勉強していた。

春にもなれば校内の至るところに白百合が咲き薫って、校内いっぱい芳香をただよわせていた。その中で師範生は左向きの百合に女師の字を入れたバッジを、高女生は右向きの百合に高女の字をあしらったバッジを胸にかかげて、ほがらかな笑い声を至るところにふりまいていた。

友よいとしのわが友よ

色香ゆかしき白百合の

心の花と咲きいでて

世に芳しくかぐわ薫らなむ。



沖縄女子師範学校

一高女は那覇・首里の者を中心に県内有力者の子弟を網羅し、師範は県下全般にわたって秀才を集めていただけに、勉強においても運動においても、県下はもとより他県の何校に比してもひけをとらないという自信に満ちて少女の道をみがいていた。

しかしこの平和な学園にも、大東亜戦によって巻き起こされた大波が次々と押し寄せてきて、少女の夢を一つ一つ打ちこわしていった。まずそれは、相次ぐ若い教員の応召による教員不足となつてあらわれた。その補充はいきおい県出身の教員をもつてあてゐることになり、他県出身の教員が目立って減少していった。彼女らのある者は、そのやるせない寂しさを、「他県の先生は来た時はうまいことを言つて私たちをおだて、去る時には都合のよい悪口を言つて逃げて行く。」と憤まんに変えて表現した。しかし彼女らの身内にも、父を戦場に送り兄を戦場に失うということが、相續いて起こるようになり、生徒の幾人かは靖国の遺児として

参拝したり、両親に代わって遺骨の出迎えに出るようなことが多くなった。こうして時局の重大性を身にしみて感ずると、彼女らはいつとはなしに軍歌をうたい、教練に力を入れるようになり、必勝の団結を固めていくのであった。更にこの団結を単なる観念としてではなく現実に具現することを迫ったのはサイパン玉砕の公報であった。

昭和十九年七月十八日、この悲しむべき公報を、私は、瀬戸内海の島々をぬって何事もなかったかのように静かに西へすべって行く船の中で聞いていた。七月の初めに熊本市で開かれた生徒主事会議に出席したついでに、沖繩に赴任以来六か年間一度も郷里に帰ったことのない妻子を郷里まで送り届け、沖繩に帰任する途中のことであった。それはアツツ、タラワ、マキン、クエゼリン島等の相づく玉砕の公報とともに、戦局の日々に非なることを物語る以外のものではなかった。

船は内海を出ると厳重な警戒体制をとって南進した。油津あぶらづに一泊して、翌日も陸岸に沿うて南下した。鹿児島に入港した時は雨だった。周囲の山に囲まれて、桜島のふもとにねむるかに見えた鹿児島港は、近よって見ると異常な混乱とざわめきの中にふるえていた。上船して来た人を取り囲んで聞いてみると、街は沖繩からの疎開者でごった返しているということであった。どんな人が何人くらい、どうして、そんな事は尋ねても無駄なことであった。私は同僚や生徒に送られて出帆した時の那覇の港を思い浮かべ、それがこの二十日の間にどのように変わったか想像してみたが、それは不可能なことであった。知っている人々の顔を思い出してみたが、だれがどうなったのか一切見当がつかなかった。

船団待ちと情況待ちのため幾日か停泊したのち、船は哨戒機と駆潜艇に護衛されて南下した。二日二晩の不安を乗せて船はやっと七月二十七日那覇港外に到着することができた。紺色の海の彼方に浮かぶ島には垣花かきのはなの燈台がいつに変わらず真白く太陽にきらめいていた。緑の松陰に点々と見える白い墓、そのふもとに立ち並ぶ赤い屋根、こうした船上から眺められる龍宮のような美しい光景は、以前となんら異なったところがなかったが、埠頭に近づくにつれて、形勢の一変していることが明らかになった。そこには疎開者の荷物と思われるものがうず高く積まれているほかは、カーキ色一色にぬり替えられて兵隊の勇ましいかけ声が周囲を圧し軍靴の緊張した響きがどこまでも続いていた。

上陸するとすぐにバスで学校へ急いだ。安里でバスを降りてなつかしい想思樹の並木道を急いだ。校内の石柱の左側が無惨に倒れていた。地面にあざやかに残っているタイヤの跡で、石柱はトラックに押し倒されたのだと判断された。いつになく静まり返った玄関を上がって行くと、西岡部長の声があつて、

「やあ、よく帰った。大変だったろう。」
と、出迎えてくれた。

「君、こちらも大変だった。沖繩はもう戦争が始まっているよ。」
と、校長室にはいつてきかされた情況は次のようなものだった。

サイパンの情況があやしくなると、突如として軍が続々と上陸して来て、どの学校も宿舎に徴用

せられ、本校も一時二千名の大部隊を收容したので学校を臨時休校にしたことや、寄宿舎では不寝番を立てて警戒したこと。一方では「まず縁故のある婦女子はすぐに疎開せよ。」というので本校職員の中でも他県出身の藤野・本間等の女の先生や、羽田先生の家族等、生徒に別れの挨拶を言うまもなく荷物をとりまとめる暇もなく出発したこと。その後、軍司令部と交渉して軍医部と経理部に校舎の半分だけ使ってもらうことにして、一応落ち着いたこと。そんなわけで少し早かったが学校は夏休みにはいることにして、今では那覇・首里等通学可能な者だけで飛行場や軍陣地の構築に協力していること。私は想像以上に急激な変化が起っていることにただ驚くばかりであった。

廊下伝いに寄宿舎に帰ってみると、ここもまた、四百名近い寮生のうち本島内の者がすでに帰省してしまつて、わずか先島や離島の者が、四、五十名程度残っているだけであつた。これらの生徒は、時局の緊迫とともに帰るにも船がなく、あるいは一年あるいは二年と親もとを離れて、雄々しく勉学に勤勞に時局の波に耐えているのであつた。その夜はこれらの生徒に取りまかれてよも山の話をしたがら、私の帰つて来たことがいささかでも彼女らの慰めになることをしみじみとうれしく思つた。

二、遅れた疎開

サイパンを攻略した敵の鋭鋒は更にテニヤンに及んだ。われわれの、「敵も相当な損害を受けているから当分大丈夫。」とか、「次は比島だ。比島にすれば袋だたきだ。」などという希望的観測にかかわらず、沖繩は一步一步と臨戦体制に切り替えられていった。

縁故疎開に引続いて宮崎や熊本・大分等の受け入れ先が決まったので強制疎開が開始され、老幼とそれに附帯する婦女子がまず第一に取り上げられた。これに従って一高女の生徒は相当数疎開したが、師範の生徒には必ずしも都合よくはいかなかった。女学校であるならばこの女学校でも疎開者を受け入れてくれるが、計画養成をしている師範学校では必ずしも転校者を受け入れてくれるとは決まっていなかった。八月中に疎開した者は、師範生は三百名中十五名に過ぎなかった。

九月になって新学期が開始され、上京中であった野田師範学校校長も帰任して、文部省の師範学校生の委託制度も明らかになったので、これらの疎開学生の取り扱いを協議した。西岡部長から「一高女のほうは私の責任において決めますが、師範のほうは校長先生で決めて下さい。」と発言があって、いろいろと協議した結果、「師範のほうは将来国民の指導者になるのだから、ただ疎開した

いはせよで放置するわけにいかない。」という意見で、「疎開の一般方針に従ってよく事情を調査の上許可し、許可した者は委託生にする。」ということに決定された。その取り扱いには生徒主事であった私が当たらねばならなかったのであるが、実際問題としては大変むずかしいことであつた。

まず老幼婦女子といつても、その中で女子青年の単独疎開は認められないのが一般方針であつた。従つて女子青年に当たるとは師範学校生、特に本科生は家族とともにその生活の必要に応じて疎開しなければならなかつた。しかしこの家族疎開は實際上縁故があるか、他になんらかの生活の見通しがないければなかなか実行出来るものではない。それが那覇首里等の指導者階級や商人等の子弟の多い一高女の疎開者が多く、田舎出身者の多い師範生に疎開者が少ないという数字になつてあらわれる。師範生の中でも都市出身者の多い本科生に多く田舎出身者の多い予科生に少ないという差異を生み出している。この本科生に多く予科生に少ないということは老幼優先の原則とは全く逆な現象になっていると言わなければならない。八月中に疎開した師範の十五名も全員本科生ばかりである。予科の生徒のほうが年少者であるから出来るだけ疎開させてやるべきであるが現実はずしもそうはいかないのである。

このような現実が生徒間にも敏感に反映して妙な空気をつくり出していく。無邪気な予科生等は、「先生、私たちは最後まで頑張るのです。どうにもならん時が来たら、国立の学校ですから軍艦で疎開させてくれます。」などと言う者もあつた。なるほど、最も合理的に問題を解決する方法